



# Rereading Dickens's Fiction: Narrative Form and Self-Reflexivity

Tsutsui, Mizuki

---

(Degree)

博士 (文学)

(Date of Degree)

2021-03-25

(Date of Publication)

2023-03-25

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

甲第7947号

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1007947>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



## 論文内容の要旨

## 論文題目

Rereading Dickens's Fiction: Narrative Form and Self-Reflexivity

(ディケンズ文学の再読: 語りの形式と自己言及性)

氏名: 筒井 瑞貴

神戸大学大学院人文学研究科博士課程後期課程文化構造専攻

指導教員氏名 (主) 奥村沙矢香 准教授

(副) 芦津かおり 教授

(副) 岸本秀樹 教授

## 序論

本博士論文はヴィクトリア朝を代表する作家チャールズ・ディケンズの小説作品を「語りの形式」および「自己言及性」の観点から分析したものである。ヘンリー・ジェイムズが評論「小説の技巧」において批判したように、ヴィクトリア朝の小説は「形式」への意識が希薄であるとされてきた。「形式(form)」という語の理解や定義は作家や批評家によって異なるものの、この時期の小説は芸術作品としての完成度や技巧面はさほど顧みられず、むしろ道徳性や教訓といった側面が重視される傾向にあったことは否定できない。主に月刊分冊や週刊連載で作品を発表したディケンズは、売上を考慮してしばしばプロットを連載途中に変更するなど読者の評判に非常に敏感に反応する作家で、加えて自身が小説観や創作活動について語ることがほとんどなかったこともあり、特に没後数十年は真剣に論じるに値しない通俗的作家であるとの評価がなされていた。

しかしながら、20世紀後半からディケンズの本格的な再評価が始まり、その作品の形式面の重要性も認識されるようになった。例えば、J. Hillis Millerは著書 *Charles Dickens: The World of His Novels* (1959)において、ディケンズの小説に内在する「捉えがたい有機的形式(an impalpable organizing form)」に焦点を当てて作品内部の諸要素を統合する体系について論じ、後世のディケンズ研究に多大な影響を与えた。このような批評的アプローチを発展的に継承する上で極めて重要なのは、ディケンズの小説が作品の創作過程や、時にはその虚構性をも読み手に意識させるような高度な自己言及性を有しているという点である。こうした「メタフィクショナル的」ともいえる実験的な手法は特に“The Poor Relation’s Story”(1852)や“George Silverman’s Explanation”(1868)などの中短篇小説においてしばしば顕著にみられるが、長編小説において見出される特徴でもある。1980年代に盛んになった新歴史主義批評においては、Catherine GallagherやD. A. Millerらが小説内部に表象された小説の相同物に注目することでディケンズ文学に込められた自己言及性を見出し、新たな作家像を浮かび上がらせることに大きく寄与した。

とはいえ、新歴史主義批評は文学テキストを同時代の権力空間に関連付ける手法であり、本質的には個々の作家の差異や特色を論じることに主眼が置かれていない。したがって、本博士論文では、テキストの「自己言及性」に焦点を当てつつ、これをディケンズという個の作家の特質に逆照射することによって、作品の形式面における芸術的完成度の再評価につなげることを試みる。近年の研究では、Kenneth M. Srokaがディケンズ的工作中に表象される「読み手」や「書き手」のモチーフを、ディケンズやヴィクトリア朝の読者との関係性へのメタフィクショナルな言及として捉えなおし、同様にMark Brian Sabeyがフィクションの道徳性へのメタ的な言及を分析している。本研究においては、個々の小説の固有のジ

ジャンルや語りの様式という観点から「形式 (form)」を位置づけ、作品の枠組みそのものに向けられる自己言及性を手掛かりとして、小説の主題とも不可分の関係にあるディケンズ文学における語りの形式の重要性について検証する。

### 第一章

ディケンズの初期の長編『ニコラス・ニクルビー』はプロットや人物造形において、ヴィクトリア朝で人気を博した演劇ジャンルであるメロドラマから強い影響を受けているが、他方で作品のメロドラマ性は主人公のニコラスが旅回りのクラムルズ一座に加わり、メロドラマの主役を演じるという自己言及的なエピソードによってパロディ化されていることが指摘されてきた。本章は、クラムルズ一座の劇中劇やメロドラマ性を誇張して脚色されたエドワード・スターリングによる海賊版との比較を通じて、『ニコラス・ニクルビー』は単なるセルフ・パロディにとどまらず、メロドラマの典型的な特質を拒絶する反メロドラマの要素を内包していることが指摘された。メロドラマ的な価値観を体現する主人公ニコラスに対して、複雑な内面性を持った悪役ラルフや、読み手の勧善懲悪への期待に反して惨めな死を遂げるスマイク、そして悪を感じ取る能力を極端に欠落させているニクルビー夫人といった脇役を配置し、メロドラマの支配的な特徴である図式化された二元論的善悪の原理が否定されている。作品はメロドラマという形式に表面上依拠しつつ批判的に提示することに成功し、幅広い読者層に訴求する芸術性を得るに至ったと結論付けた。

### 第二章

『ニコラス・ニクルビー』にみられるジャンルの曖昧性は、ディケンズの長編小説中最も評価の低い『バーナビー・ラッジ』においても推理小説と歴史小説の混在という形で現れている。作品前半では、殺人事件をめぐる煽情的なプロットによって読み手の好奇心を喚起する技巧が用いられているが、作品後半の主題であるゴードン暴動のプロットにおいては、あたかも作者自身のそうした創作技法を戯画化するかのよう、謎を創出して人心を掌握する陰謀家の姿が描かれる。作品内部のこのような形式上の「分裂」を反映するかのよう、「偽装」と「欺瞞」というモチーフはプロット上の主題として前景化されており、あらゆる登場人物が例外なくアイデンティティの二面性を帯びているのが『バーナビー・ラッジ』の特徴であると言える。自己像の認識をゆがめられ悪の手先として操られるバーナビーやゴードンから、宗教的大義によってその醜悪な実態を隠蔽する反カトリック暴動に至るまで、作中のあらゆる事象において形式と内実は乖離し、深層は表層によって偽装されており、このような作品の形態及び主題と密接に結びついた「偽装」のモチーフの反復が作品を緊密かつ有機的に統合していると結論付けた。

### 第三章

『バーナビー・ラッジ』で探求されたアイデンティティの問題がさらに掘り下げられるのが『デイヴィッド・コパーフィールド』である。作者自身を多分に投影した小説家デイヴィッドの自伝という形式をとった本作は、ディケンズが長編小説で初めて一人称の語りを採用した作品でもある。不安定な自我に苦しむデイヴィッドは自らの人生を書き記す行為を通じてアイデンティティを確立しようとするが、作中にはデイヴィッドと同様に言語による自己表現を試みる登場人物が数多く登場し、いわばデイヴィッドの自伝の中にさまざまな「自伝的」語りが埋め込まれた構造になっているといえる。本章ではこうした登場人物の自己を語る試みを、それを記録する語り手デイヴィッドの自伝執筆行為そのものに読み手の注意を向けさせる自己言及的な装置として分析した。ユリア・ヒープ、ストロング博士やディック氏といった「分身」を精査することで、デイヴィッドが自伝執筆において抱える様々なジレンマが浮き彫りになる。多くの登場人物と同じように、自らについて語ることで自我を構築しようとしつつも、過去のトラウマを他者に明かすことに抵抗を感じるデイヴィッドのジレンマが、存在するはずのない自伝の「読者」に関する矛盾した意識を生んでいると指摘した。

### 第四章

『デイヴィッド・コパーフィールド』で個人のトラウマを描いたディケンズは、『二都物語』においてフランス革命と恐怖政治の時代という、ヨーロッパ社会に集積的トラウマをもたらした出来事を取り上げた。『バーナビー・ラッジ』に続く二作目の歴史小説となった本作においてディケンズは、「歴史」や「過去」をいかに解釈し、語るかという「歴史小説」の在り方そのものと直結する問いをプロットを中心に据えている。作品の主題であり最重要のモチーフとして前景化される「蘇り」が、ウォルター・スコットやトーマス・カーライルの著作において歴史叙述のメタファーとして用いられてきたことから、この作品におけるディケンズのメタ的な意識は明らかである。偽証による不正のはびこる裁判や、反復するトラウマ的記憶を綴ったマネットの手記は、歴史小説・歴史叙述のアナロジーとして機能しており、歴史の歪曲や革命の再発といった、ディケンズ自身が抱えていた問題意識が投影されている。一方で、主人公カートンの英雄的な自己犠牲の行為の中に、ディケンズは過去とのあるべき向き合い方を提示するとともに、歴史が正しく語り継がれていく未来を予見することでこうした不安を払拭しようとしている。従来歴史観が欠落していることと批判されてきた『二都物語』であるが、歴史小説という自らの作品形態を不断に問い直し、過去との対峙そのものを主題に据えた点で、独自の歴史への意識を持った作品であると言える。

### 第五章

ディケンズが完成させた最後の長編小説となった『互いの友』は、多数の登場人物やプロットが交錯する複雑さゆえに、特定のジャンルに分類することが困難であるが、「虚構」のモチーフが反復され、フィクションそのものについての内省に満ちた作品となっている。作中の「虚構」のモチーフは、さまざまな架空の事象や約束事を共有することで成立するロンドン社交界の希薄な人間関係を浮き彫りにする一方、過酷な現実に対処する手段として肯定的に描かれるなど、明らかに両義性を帯びている。遺産の相続により大富豪となったニコデマス・ボフィンが、利己的な守銭奴に墮落していく芝居をすることで、養女のベラ・ウィルファーを改心に導くという後半のプロットは、作品の致命的な欠点とされることが多かったが、一連の「虚構」のモチーフの中に位置づけて分析することにより、ベラ、そして読者をも欺くボフィンの芝居には、道徳的再生の契機となりうるフィクションの力を称揚するディケンズの意図が込められていることが鮮明になる。公開朗読に打ち込む一方で、晩年のディケンズはかつてないほど創作力の衰えに苦しんでいたとされるが、その過程の中で自らの執筆行為の意味を作中で問い直し、プロット上の倫理的な主題と結び付けて読み手に提示している。

結論

自身の主宰した週刊誌『家庭の言葉』や『一年中』においても、ディケンズは自らの創作活動について述べることはほとんどなく、小説論のような文章も残していない。しかしながら、テキスト内の自己言及の表象に焦点を当てて分析することで、ディケンズが個々の作品における語りの形式に抱く葛藤や不安を作中で提示し、自らの執筆行為を内省し時にパロディ化していたことが分かる。メロドラマ、推理小説、歴史小説や一人称の自伝的小説など、それぞれの作品においてその主題と密接に関わるフィクションの形態を取り入れつつ、自身の表現形式を相対化するという作業の反復を通じて、ディケンズは小説家としての技法を発展させ深めていったといえる。

論文審査の結果の要旨

氏名	筒井 瑞貴
論文題目	Rereading Dickens's Fiction: Narrative Form and Self-Reflexivity (ディケンズ文学の再読：語りの形式と自己言及性)
要旨	<p>本論文はイギリス・ヴィクトリア朝の代表的作家 Charles Dickens (チャールズ・ディケンズ) の長編小説を「語りの形式」および「自己言及性」の観点から考察したものである。従来、ヴィクトリア朝小説はその道徳的・教訓的特徴にのみ注目が集まり、芸術作品としての完成度や技巧の点で評価されることは少なかった。しかし、こと Dickens の小説に関しては、20 世紀後半に本格的な再評価が始まるなか、作品の形式面の充実性が指摘されるようになった。例えば J. Hillis Miller は、Dickens 小説に優れた有機的構造が内在することを明らかにしている。Catherine Gallagher や D. A. Miller は Dickens 小説内部に挿入された「小説」のモチーフに注目することを通して、作品の内省的な構造を分析している。このような批評的アプローチをさらに推し進めるうえで、Dickens 小説が創作のプロセスや、時にはその虚構性をも読者に感知させ得るような高度な自己言及性を有しているという点に注目して小説の創作法を探究することは極めて重要である、と本論は述べる。また特に、先行研究が作家個人の特色を論じることを主眼としていないという事情を鑑みるに、テキストの自己言及性の議論を通して Dickens という作家の特質を明らかにし、そうすることで Dickens 作品の形式面における芸術的完成度の再評価を試みることは、大いに意義のあることである、と主張している。</p> <p>本論文は以上を「序論」(Introduction) とし、以下、Dickens による 5 本の小説をそれぞれ扱った 5 つの章(Chapter) と、論文全体をまとめて今後の展望を示した「結論」(Conclusion) によって構成されている。</p> <p>論文の第 1 章は、Dickens の初期の長編 <i>Nicholas Nickleby</i> を取り上げている。本作品はプロットや人物造形においてヴィクトリア朝で人気を博した演劇ジャンルであるメロドラマの影響を受けているが、従来の批評では、そうした本作品のメロドラマ性は、本作品の劇中劇——主人公が主役を演じるメロドラマ——を通して抑圧されているということが指摘されてきた。これに対し本章は、本作品が単なるセルフ・パロディにとどまらず、メロドラマの支配的な特徴であるところの図式化された二元論的善悪の原理を拒絶する反メロドラマの要素を数多く含んでいることを明らかにしている。本章には本作品の教養小説的特質をメロドラマというジャンルと全く相容れないものとして処理するなど、やや慎重さに欠ける点が見受けられるものの、細部にわたる緻密なテキスト分析を通して本作品の構造を徹底的に洗い出したという点では見るべきものがある。</p> <p>第 2 章は第 1 章におけるジャンルの曖昧性の議論を受けて、推理小説と歴史小説という 2 つのジャンルの混在がみられる長編小説 <i>Barnaby Rudge</i> を取り上げている。本作品は前半が殺人事件をめぐるセンセーショナルな推理小説から成り、後半がゴードン暴動の史実に取材した歴史小説から成るといって、一見したところ分裂した構成をとっており、この点をもって一般的には駄作とされる。これに対し本章は、作品の後半部が前半部における作者の創作技法のパロディとなっていることを指摘し、さらには、このうわべだけの分裂を見せる形式が「偽装」「欺瞞」という小説の主題と緊密に結びついていることを明らかにしている。本章は大部分が小説の主題に関わる議論となっており、肝心の自己言及的構造の探究が不十分であるという短所を有するものの、作品前半部の内容の下敷きとして James Hogg の短編小説“The Bridal of Polmood”を Dickens 研究史上初めて探り当てたという点で、確かな斬新性を披瀝している。</p>
主査記載氏名・印	芦津 かおり

第3章は、Dickensが初めて一人称の語りを採用した作品 *David Copperfield* を扱っている。本作品は作家 Dickens の分身的存在である David が執筆した自伝という形式をとっているが、本章は、David 以外にも言葉による自己表現を試みる登場人物が本作品には多数含まれ、結果として本作品が David の自伝の中に様々な自伝的語りが埋め込まれた構造となっていることを指摘している。さらには、そうした複数の自伝的語りや、それを記録する語り手 David の自伝執筆行為そのものに読者の注意を喚起する自己分析的な仕掛けとして機能していることを明らかにしている。登場人物らの一人称の告白すべてを自己言及の仕組みへと回収するというやり方はやや恣意的ではあるものの、本章は、本博士論文の主題であるところの自己言及性の問題を最も深く探究した章であるといえる。

Dickens による第2作目の歴史小説 *A Tale of Two Cities* を取り上げた第4章では、従来歴史認識が欠落していると批判されてきた本作品を、「歴史」や「過去」をいかに解釈し、語るかという「歴史小説」のあり方そのものへの本質的な問いをプロットを中心に据えた、いわばメタ的な歴史小説と見做し得ることを指摘している。本章はその裏付けとして、Dickens に影響を与えた歴史小説家 Walter Scott や歴史家 Thomas Carlyle の著作において歴史叙述のメタファーとして用いられている「蘇り」のモチーフが本作品に多数含まれているという事実を挙げている。本章は Dickens 自身の歴史認識についての探究が不十分であるという点でやや説得力に欠けるものの、歴史小説というジャンルに対する作家の確かな関心と問題意識を焙り出した点にその意義を認めることができる。

第5章は Dickens が完成させた最後の長編小説とされる *Our Mutual Friend* を扱っている。創作力の衰えの著しい晩年に生み出されたと言われる本作品にはフィクションの表象ともいえる「虚構」のモチーフが繰り返し現れ、フィクションのあり方について熟考する作家の姿勢が感じられる。特に、それら「虚構」のモチーフが人を欺くというネガティブな性質を帯びる一方で、人を倫理的な正しさに目覚めさせる可能性を有したものとして本作品内に登場するという事実からは、創作に悩みながらもその意義を信じつづけた Dickens の晩年の境地を窺い知ることができる、と本章は論じている。第3章と同様、自己言及の仕組みの指摘がどれだけ妥当なものであるのかという点に疑問は残るものの、本章は前章までの議論の流れをくみつつ、Dickens のキャリアの終盤について一定の見解を提示し得ているという点で評価に値する。

以上のように、各々の小説においてその主題と密接に関わる文学のジャンル——メロドラマ、教養小説、推理小説、歴史小説、自叙伝——を作品の形式として取り入れつつ、自身の表現形式を相対化してみせるという作業の反復を通じて、Dickens は小説家としての技法を深化させていった、と本論文は結論づけている。

本文中で筆者自身も認めている通り、本博士論文は Dickens による数多くの小説のうち、わずか5本を取り扱っているにすぎず、そのため、Dickens の作家としてのキャリアを俯瞰し得るような視座を獲得してはいない。しかしながら、先行研究の所産に基づきつつ、他に類を見ない精緻なテキスト分析と広範な資料の調査を通して既存の批評の盲点を次々と衝くことに成功している本論考は、執筆者の確かな研究能力の証左であり、執筆者の今後の活躍と当該分野への多大なる貢献を約束するものであるといえる。

以上の審査結果により、審査委員会は論文提出者筒井瑞貴が博士(文学)の学位を授与されるに値するとの結論に達した。

## 審査委員

区分	職名	氏名	区分	職名	氏名
主査	教授	芦津 かおり	副査	特任講師	大住 めぐみ
副査	教授	山本 秀行	副査	神戸市外国語大学教授	新野 緑
副査	准教授	奥村 沙矢香			